秋田大学広報誌〈アプリーレ〉

Aprire

No.62
2019

〈特集〉高齢者医療先端研究センター新設

特集 秋田大学高齢者医療先端研究センター新設

秋田県の健康寿命日本一を目指して

○秋田県の健康寿命について

皆様もご存じの通り、秋田県は日本一の少子高齢化を迎えている県です。秋田県の総人口における65歳以上の高齢者の割合は36・3％(約3人に一人が高齢者)(平成30年7月1日現在)となっており、高知県や島根県を抜いて断然トップに立っています。さらに人口の減少率も極めて著しく、総人口が100万人割れを記録、総人口98万3千人、対前年度比マイナス1・48％(平成30年7月1日現在)となっています。その詳しい内訳をみると自然増減(つまり出生や死亡)ではなく、社会増減(転入や転出)の占める割合が大きくなっており、それだけ秋田県を去っていく人が多いということも示しています。このようにすでに超高齢社会となっている秋田県ですがその平均寿命をみてみると男性は79・51歳、女性は86・38歳と全国平均と比較すると低いものとなっています(平成27年度 厚生労働省 人口動態・保健社会統計室資料)。こういった傾向は昭和40年代から続いており、生活習慣などが大きく関与している可能性もあります。さらに医療や介護に頼らず自立した生活ができる期間を表す健康寿命についても男性71・21歳、女性74・53歳と全国平均を下回っており、男性にいたっては全国最下位となっています。

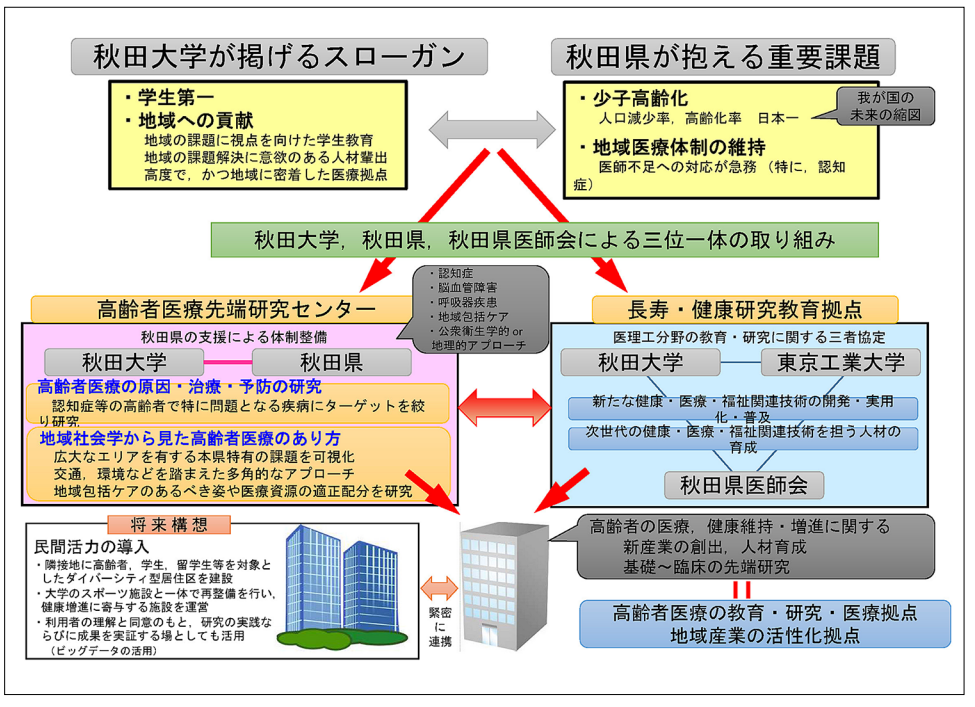
○高齢者医療先端研究センター設置の経緯

こういった秋田県での少子高齢化に対応するため、秋田大学は秋田県に対してセンター設置の支援を要請し、実際に設置することとなりました。この度設置された秋田大学高齢者医療先端研究センターは、高齢者医療等に関する体制の充実を図ることにより、高齢者に多い認知症や地域社会学の知見を踏まえた高齢化社会についての学際的研究と高齢者医療の先端的研究を推進し、地域医療の向上と長寿・健康のための教育研究の発展に寄与することを目的としています。

秋田県が抱える重要課題である「少子高齢化」や「地域医療体制の維持」、そして秋田大学が掲げるスローガンである「学生第一」「地域貢献」といった考え方を合わせ、秋田県、秋田大学、及び秋田県医師会による三位一体の取り組みとして、高齢者に特に多い認知症や呼吸器疾患(肺がんや誤嚥性肺炎)などの疾患をターゲットに絞りながら、老化関連疾患の原因・治療・予防についての研究を行うことも主な目的としています。

また秋田県の広大な地域における特有の課題を可視化し、交通、環境、文化などを踏まえた多角的なアプローチを行い、地域包括ケアや医療資源の適正配分等についても研究していくこととしています。つまりは医学的アプローチのみならず、地域社会学や理工学の知見も同時に集積し、秋田大学全学部横断的に学際的研究を行うことを目指していきます。

さらに平成29年度から、医理工連携をより効果的かつ力強く推進するため、秋田大学、東京工業大学、秋田県医師会の三者間連携協定を締結し、医療・介護機器や医薬品の開発等による産業の創生や振興に向けた取り組みを始めたところです。



○高齢者医療先端研究センターの組織

高齢者医療先端研究センターは秋田大学全学での連携組織です。今年度6月より新たにセンター長1名(老年医学・医師)が配属となり、センター長のほかに、教育文化学部から副センター長1名(地域社会学)、特任講師1名(地域社会学)、医学部から特任助教(呼吸器内科学・医師)2名で正式にスタートしました。さらに秋田大学生体情報研究センターや秋田大学医学部保健学科の先生方にも加わっていただくことになっています。今後さらに人員を増やし、センターの充実を図っていきます。また医学部や教育文化学部のほかにも、理工学部や国際資源学部とも連携しながら、高齢者医療の推進のため協力していくこととしています。

○秋田大学高齢者医療先端研究センターの発足を記念し市民公開講座を開催

日時：平成30年12月16日(日)
会場：カレッジプラザ講堂
講演テーマ：秋田県の健康長寿延伸を目指して！～高齢者にやさしい地域づくり～

秋田県の健康寿命延伸に向けた取り組みを紹介するとともに、高齢者の認知症やフレイル(加齢に伴い心身が衰え、要介護手前にある状態)、そして誤嚥性肺炎などの呼吸器疾患についてその基本知識を学ぶとともにその予防法について考えました。

さらに、羽後町での認知症サポーターの取り組みやコグニサイズの実演など、盛りだくさんの内容となり、市民の方々とともに「秋田県の健康寿命日本一」に向けた取り組みとして大きな一歩となりました。

秋田県の高齢者や認知症の方々やそのご家族の視点を最も重視して、次の事業に取り組みます。

高齢者や認知症の方々は今後さらに増えていきます。特に認知症は高齢化に伴い、日本だけではなく世界でも、発症者数は増加しています。厚生労働省の報告によると、日本では2050年には900万人に達すると推計されており、これは高齢者人口の25%、4人に1人にも上ります。また、全世界でも2015年から2050年にかけて、5000万人から1.5億人へと、約3倍になることが予想されています。こういった状況の中、高齢者や認知症の方々、そのご家族、そして社会にとっても、さまざまな課題が生じることが懸念されます。高齢者の方々や認知症の当事者、そのご家族の視点を最も重視しながら、秋田大学高齢者医療先端研究センターでは2つの面を同時に取り組んでいくことが重要と考えます。1つは、高齢者に多い疾患である認知症や呼吸器疾患等の予防法、診断法、治療法に関する研究開発です。もう1つは、高齢者の方々にとってのやさしい地域づくりであり、当事者の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域の良好な環境で自分らしく暮らし続けることができる社会の実現を目指すことです。この2つを両輪として取り組むことがこのセンターの大きなミッションでもあります。

認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）の概要

～ 認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて ～　（平成27年1月策定・平成29年7月改定）

- 新プランの対象期間は団塊の世代が７５歳以上となる２０２５（平成３７）年だが、策定時の数値目標は、介護保険事業計画に合わせて２０１７（平成２９）年度末等で設定されていたことから、第７期計画の策定に合わせ、平成３２年度末までの数値目標に更新

新オレンジプランの基本的考え方

- 高齢者の約４人に１人が認知症の人又はその予備群。高齢化の進展に伴い、認知症の人はさらに増加
  ２０１２（平成２４）年４６２万人（約７人に１人）　⇒　２０２５（平成３７）年約７００万人（約５人に１人）
- 認知症の人を単に支えられる側と考えるのではなく、認知症の人が認知症とともによりよく生きていくことができるような環境整備が必要。

認知症の人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域のよい環境で自分らしく暮らし続けることができる社会の実現を目指す。

- 厚生労働省が関係府省庁（内閣官房、内閣府、警察庁、金融庁、消費者庁、総務省、法務省、文部科学省、農林水産省、経済産業省、国土交通省）と共同して策定
- 策定に当たり認知症の人やその家族など様々な関係者から幅広く意見を聴取

七つの柱

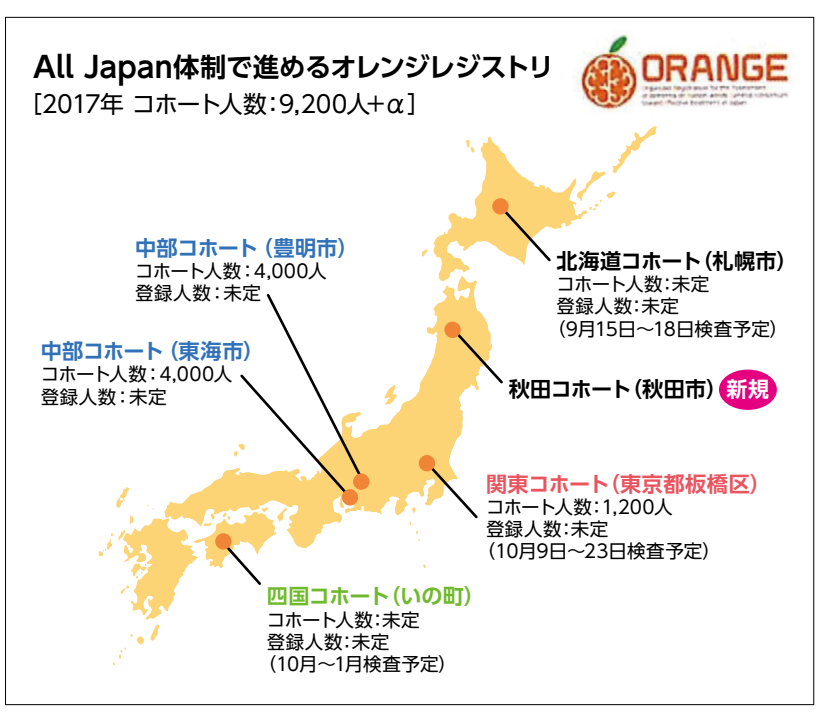
①認知症への理解を深めるための普及・啓発の推進
②認知症の容態に応じた適時・適切な医療・介護等の提供
③若年性認知症施策の強化
④認知症の人の介護者への支援
⑤認知症の人を含む高齢者にやさしい地域づくりの推進
⑥認知症の予防法、診断法、治療法、リハビリテーションモデル、介護モデル等の研究開発及びその成果の普及の推進
⑦認知症の人やその家族の視点の重視

○高齢者に多い呼吸器疾患への対応

秋田県は特に喫煙率の高い地域でもあります。タバコを吸うと肺がんに加えてCOPD(慢性閉塞性肺疾患)という病気になりやすくなります。こういった高齢者の様々な呼吸器疾患に対して、秋田大学医学部呼吸器内科学講座と連携しながら、その診療や予防・治療につながるような研究を推進していく計画としています。

○認知症の予防や危険因子の解明に向けた取り組み

近年、認知症予防のためには、発症する15年以上前からの治療が必要かもしれないということが分かってきました。そのため、国立長寿医療研究センターでは、平成27年度から日本全国で認知症の予防や治療薬の効果検証をするための「オレンジレジストリ」というデータ収集を開始しています。これは、認知機能と体力測定を無料で行い、定期的に認知症の予防や治療薬の最新情報を得ることができるものです。さらに、認知機能検査を5年間無料で受けられ、自身の認知機能の状態を正確に把握することができます。今年度から、秋田大学高齢者医療先端研究センターでも横手市と協力してこの事業に取り組むこととなりました。今後さらに秋田県内の他の市町村でも展開していく予定としています。



オレンジレジストリ風景（雄物川）

オレンジレジストリ風景（大雄）

○認知症予防のためのコグニサイズの取り組み

認知症予防を目指した運動プログラムのことを「コグニサイズ」といいます。コグニサイズは、体を使う運動課題と頭を働かせる認知課題、この二つを同時に行うことで記憶力や運動能力の向上を目指すものです。秋田大学医学部保健学科ですでに数年前から開始された事業ですが、当センターも加わりさらに事業を継続拡大、研究へと発展させるため協力する計画になっています。

コグニサイズ

○認知症を早期に発見、診断する血液バイオマーカーの確立を目指して

秋田大学高齢者医療先端研究センターでは、生体情報研究センターと連携して、世界に先駆けたリピドミクス技術を用いて認知症を早期に発見、診断する技術の研究を行う計画としています。この技術がうまく確立できれば、従来だと髄腔から髄液を採取するため、非常に侵襲性が高く、時間と手間がかかる検査を受ける必要がありましたが、新しい検査では血液一滴で足りるため、低侵襲かつ単純で、安価に検査できる可能性があります。こういった新しい技術を確立するための研究により、認知症を早期診断、早期対応できる地域の取り組みにつないでいくことが重要です。

秋田県の高齢化社会における地域課題について

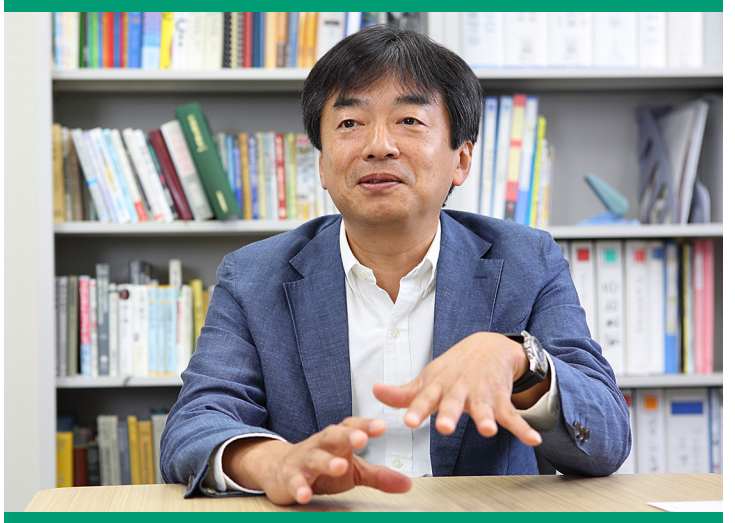
秋田大学高齢者医療先端研究センターでは、地域社会学を活用しながら秋田県での高齢化率や各地域の違いというものや、その中でも特に認知症に焦点を絞り、高齢化や地域課題との関連について調査を進めていく予定になっています。

以上、高齢者医療先端研究センターでは様々な研究を展開し、秋田県の方々の健康寿命延伸に寄与するための健康づくりに貢献するよう様々な取組を推進することとしています。

紹　　介

国際資源学部

オール秋田で「地中熱利用システム」の普及を目指す



大学院国際資源学研究科　資源開発環境学専攻
藤井　光 教授

優れた節電・省エネ効果を誇る、地中熱ヒートポンプ

地中熱とは、地下約200mの深さまでの地中にある熱のことです。地中熱利用は、安定した熱エネルギーを地中から取り出し、冷暖房や道路の融雪、給湯などに利用することをいいます。

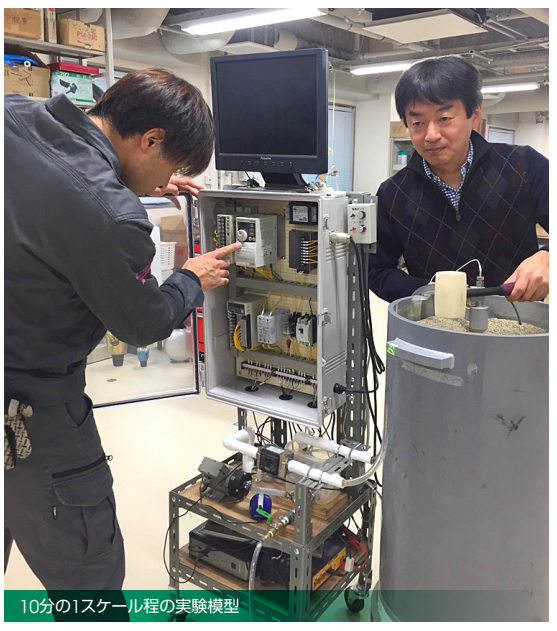
利用方法は、ヒートポンプ、水循環、空気循環、熱伝導、ヒートパイプの5種類あり、それぞれ用途に合わせて選定することになります。

地中は土壌の断熱機能により大気の温度変化を受けにくいため、約10m以深の地中温度は秋田市周辺では年中約15℃に保たれています。太陽光発電のように天候に左右されることがないため、季節を問わず安定して利用することができます。

導入するには、地中に50～100mくらいの井戸を掘り、水や不凍液の入ったパイプ(地中熱交換器)を入れます。冬に暖房として利用する際は、地中の熱を採り(採熱)、ヒートポンプで40℃くらいの温水をつくり、空気を温めて温風を出します。夏に冷房として利用する場合はその逆で、地中に熱を逃して(放熱)5℃くらいの水をつくり、それを循環させて冷風を出します。日本は四季があるため、「夏に地中へ放熱した熱を、冬に再利用する」というエコサイクルが適しているといいます。年間の温度差がない熱帯地方や極寒地方での利用が難しいというデメリットがありますが、このような地方でも利用できるような研究開発も進められています。

一般に使われているエアコン(空気熱源ヒートポンプ)は、冷房時に発生した熱を大気中へ放熱するため、ヒートアイランド現象の一因とされています。最近多く発生しているゲリラ豪雨の原因にもなっており、都市部で問題になっています。夏は暑い外気を取り込み温度を下げ、冬は冷たい外気を温めて温度を上げなければならないため、電気代もかさんでしまいます。

一方、地中熱ヒートポンプは熱を放出しないのでヒートアイランド現象の緩和につながるとされています。また、地中の安定した熱源を利用するため、通常のエアコンと比べると3～5割の節電・省エネ効果が期待できます。



10分の1スケール程の実験模型

秋田における地中熱利用システム普及拡大の支援

●効率的システムデザイン構築

全国的にも一般住宅、事務所、公共施設での地中熱ヒートポンプ導入が増えてきていますが、初期導入コストの高さがネックとなっています。

「初期投資は大きいですが、パイプに使用しているポリエチレン樹脂は地中でも腐食しないため、メンテナンスコストが不要なんです。掘削は専門業者に委託となりますが、効率良くたくさんの熱を得られる場所の選定、適正な長さの井戸を掘るための技術開発が課題となります」

井戸は長いほど熱が取りやすいそうですが、パイプ1mあたりの熱が多く得られるようになれば、井戸は短くても済むようになります。藤井教授の研究では井戸の構造を見直したり、井戸に使用する材料を改善することにより、井戸の長さの削減に成功しています。

●秋田平野の地層評価技術と必要熱交換井の長さマップ作成

地中熱ヒートポンプに適しているのは、常に地下水が流れている場所だといいます。「地下水は夏に放熱で暖められた地中温度を下げてくれる」、つまり熱の履歴が残らないのです。それにより、効率の良い熱交換が可能になります。

地下水が流れている地域を見つけるには、周りの地質の情報を総合的に判断しなければいけません。藤井教授は秋田平野の地層を評価して地中熱交換井の必要な長さを表す「秋田平野の必用熱交換井長さマップ」を作成しました。この結果、秋田平野沿岸部では55～70m、平野部では60～90mの長さの井戸が必要であることがわかり、秋田平野東部から西部にかけて熱交換井が短くなる傾向を示すことが明らかになりました。掘削費用は1m当たり1万～1万5千円かかりますが、このマップにより導入費用の目安がわかりやすくなりました。

●秋田大学内にも地中熱利用システムを導入

地中熱ヒートポンプを設置するには、必要最小限の井戸の長さで済む場所を見つけることがポイントになります。地層の評価試験と技術開発研究を基に、いかにして効率の良いシステムをデザインするかが鍵になります。

現在、秋田大学国際資源学部棟内でも地中熱利用システムを導入しています。60mの深さまで掘削して、地下水を利用した循環ポンプ内蔵型のヒートポンプを設置しています。このシステムはエネルギー資源工学研究室の冷暖房に使用されており、学生達の研究テーマのひとつにもなっています。

「経済性と省エネ性の両方を保ち、いかにして短いパイプで済ませるかが腕の見せどころです」と藤井教授は語ります。

藤井研究室の冷暖房に使われる地中熱利用ヒートポンプ

普及が期待される地中熱利用の今後

「地球温暖化を解決するには、“多方面から、急いで、少しずつ”対処していかなければいけません。地中熱利用でエネルギー消費量を削減することができれば、温暖化対策となります。そのため人類の将来にとって、とても有用な研究だと考えています。この研究に興味のある方、社会に貢献したい方は、ぜひ一緒に研究していきましょう。皆さんの入学をお待ちしています。

また、県内企業の方々にはぜひこの研究に参入していただきたいと思っています。地中熱利用は地場産業での導入が可能です。初期の高度な設計は必要ですが、井戸の掘削や配管など、地元企業の皆さんのお力を借りる必要があります。この事業が秋田県の活性化に繋がり、人口減少ストップにも貢献できるのではないかと思います」

地中熱ヒートポンプは、節電や省エネによるCO_2排出削減効果の切り札とされています。東京電力管内で冷房に使用している電力は約1000kWですが、地中熱を利用した場合は約30%の節電が可能なため、約300kWもの節電効果が見込まれます。地中熱利用システムの普及度は、他の再生可能エネルギーに比べるとまだ低いといいます。オール秋田でつくる地中熱利用システムの、更なる普及に貢献していきたいと、藤井教授は話します。

秋田大学大学院　国際資源学研究科資源開発環境コース　エネルギー資源工学研究室ホームページ　http://energy.mine.akita-u.ac.jp/

教　　員

医　学　部

出逢いが結びつけてくれた、地域密着型研究

大学院医学系研究科　保健学専攻 作業療法学講座

石川　隆志 教授

三種町上岩川地区の健康増進に関する研究

秋田大学医学部保健学科では、教授や学生が地域の医療機関や市町村と積極的に連携し、様々な体験型学習、地域連携演習を行っています。その取り組みのひとつに石川教授が中心となって取り組む「三種町上岩川地区の健康増進に関する研究」があります。

三種町上岩川地区は、三種町南東部房住山の山裾に広がる山間地帯。人口減少と少子高齢化が進む、いわゆる過疎集落です。2009年、ふるさとの衰退を食い止めるべく立ち上がった地元高齢者たちによる「房住里の会」が発足。地域の元気づくり活動を続けてきました。しかし高齢化が著しく、自立的安定的な仕組みに仕上げるにはもう少し頑張りが必要だったと言います。そこで、住民が充実感をもって暮らせる高齢社会を構築するために、これまで住民たちで進めてきた取り組みを強化し、「絆と健康と農業」を柱とした三種町上岩川地区の自立再生事業がスタートしました。

この事業立上げには、秋田県立大学生物資源科学部の荒樋豊教授が当初から尽力されてきました。荒樋教授を通じて三種町と石川教授との関わりが始まり、房住里の会会長の岡正英氏と出逢ったと言います。岡氏から「心身の健康意識の醸成面でのサポートと研究」の依頼を受け、三種町上岩川地区の自立再生事業での調査研究が始まりました。

高齢者の生活リズム調査とフィードバック

房住里の会からは、「調査研究には協力を惜しまない」「学生にも参加してもらい、地域の高齢者と交流をしてほしい」という2つの要望があったそうです。

まずは2013年10月、作業療法学講座の学部生と院生、教員を引き連れ、上岩川地区で健康講座を開きました。その後は学生による生活時間構造の聴取、心身機能や生活状況に関する生活リズム調査へと進みました。地元高齢者の前日の行動を30分刻みで聴き取り、ADL(日常生活活動：食事、排泄、入浴など)に関係するもの、仕事、余暇、休養に関係するものに分類します。併せてIADL(手段的日常生活活動：家事全般、預貯金の管理、買い物など)を評価します(老研式活動能力指標)。そして社会との関わりがどのくらいあるか評価(社会関連性指標)し、生活リズム質問票を用いた生活リズムの評価と、連続的携行型行動量計による1週間の活動量測定から、生活リズムの総合的評価を行いました。

「今まで健康増進に関心が低かった住民の方でも、作業療法士の提案により活動的になり、健康観も上がったという話はあります。しかしその人に効果的だったことが他の人にも当てはまるとは限りません。一人ひとりの生活の様子も聞きながら、質と量の両面から評価します」

生活リズム調査で得られた評価結果や行動量計のデータは参加住民にフィードバックされます。自分の心身の状態を知ることは健康意識や意欲醸成に繋がると、石川教授らは考えます。また、昼食の際には地域の方々も集まり、郷土料理のだまこ鍋作り体験や交流会も行われました。学生にとっては普段、あまり接する機会の少ない高齢者の方々と触れ合う貴重な体験となり、地元高齢者の皆さんにとっても、若者との会話は楽しく良い刺激となったようです。

実習の様子

自分なりのコミュニケーションを

2014年以降は、この活動が3年次の授業に組み込まれました。「発達・老年期障害作業療法評価法実習」では、地域在住の高齢者を対象に心身機能や社会生活機能を、日常生活などの様々な場面から評価を行い、生活支援を検討します。

参加者は学生14～20名と教員3～5名です。午前中は住民1人に対して学生2人で評価を実施します。お昼は恒例となっただまこ鍋作り体験を楽しみ、地元の食文化に触れる機会となっています。食後は交流会として地域住民と学生が一緒にレクリエーションを実施します。レクリエーションでは、高齢者の身体的及び認知的予防を目的に、学生が企画立案した活動を実際に行ってもらいます。

「将来、作業療法学専攻の学生の多くは、障害を持つ方を対象として仕事をすることになります。その中で『相手とお話しする』場面は必ずあります。今の学生は高齢者や障害を持つ方と話す機会が少ないです。相手の声に耳を傾け、コミュニケーションを図る中で本人の希望を汲み取り、支援につなげることは、リハビリテーションや作業療法の中では大事なことです」「たくさん話せるから良いとか、口数が少ないからダメということではなく、自分なりにその人との関係を築くための練習の場だ」と学生に日々伝える石川教授。たとえ話すことが得意でなくとも、自分なりのコミュニケーションの取り方を見出すことが大切なようです。大学の授業では異なる学年でチームを組んでの実習もあるため、学生間の交流は多くあります。しかし県外出身者は就職後に秋田弁に戸惑う場面も多々あり、このような秋田の高齢者との触れ合いは、大変貴重な場となっています。

表情や動き、言葉から様々なことを感じ取ってほしい

「高校生の皆さんには色んな経験をしてほしい、そして自分の身体を使ってほしいということを伝えたいです。様々な情報を自分の身体に取り入れ、周囲の環境と関わり、自己を表現しましょう。情報過多の世の中で、テキストベースの情報ばかりでは消化不良になってしまいます。周りの人の表情や動きを見ているだけでも、様々なことを感じ取ることができるはずです。身の回りで起きているリアルな感覚を大切にしてください」

医療福祉の現場で働くにあたり、文字で得られる知識ももちろん不可欠ですが、対象者の表情や言葉からしかわからない体調の変化や心の声があるはずです。地域密着型実習での高齢者との触れ合いが、作業療法士として大切な感覚を学生たちに教えてくれるのかもしれません。

秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻・医学部保健学科ホームページ　http://www.med.akita-u.ac.jp/hoken/

●秋田大学研究者特設サイト「Lab Interview」で、インタビューの詳細や学生の声を掲載していますので、ご覧ください。　http://www.akita-u.ac.jp/honbu/lab/

リレーエッセイ 第10回

秋田大学経営協議会学外委員の皆さんから、秋田大学に対するメッセージを寄せていただいております。

秋田大学に期待すること

経営協議会学外委員
長崎大学名誉教授
片峰　茂

東北とのご縁

私は、秋田からは随分離れた日本の西の端長崎で生まれ、長崎大学で学び、昨年まで長崎大学長を務めました。70年近い人生のほとんどを長崎で過ごしましたが、東北とは浅からぬご縁をいただきました。

40数年前、大学卒業前に一人でふらりと訪れた十和田や蔵王で見た雪への憧れが、東北大学大学院への入学に繋がりました。青春真只中、研究室の仲間たちと切磋琢磨し、共に笑い泣いた仙台での4年間は、私の人生の宝物です。秋田にも何回も足を延ばしました。

その時の恩師石田名香雄先生（後に東北大学総長）は常日頃から、「ことを為すには“闘争心”とともに“平常心”を併せ持つことが大切である」と弟子たちに説かれました。とりわけ東北人の特長は、その特有の平常心にあるとし、「東北の広々とした野に出た時に感じる、とらわれぬ闊達な心」と形容されました。自らと向き合う無心の境地＝“平常心”です。齢を重ねてもなかなかその境地に到達することは叶いませんが、私の心の中で恩師の言葉は今でも鮮烈に光を放ち続けています。

数十年の時を経て、この度、山本学長のご高配により、秋田大学経営協議会の一員として、また再び東北とのご縁を結ぶことができたことは望外の喜びです。秋田大学の発展のために少しでもお役に立てれば幸いです。

いま、地方創生がこの国の喫緊の要となる中、東北、九州を問わず、改めて地方に存在する大学の意味が問われています。地方創生のために、大学はどんな役割を果たせるのか、何を為すべきかという問いです。根源的な課題は、地方からの人口とりわけ若者人口の流出です。進学や就職の時期に若者が県外に流出しています。地方大学卒業生の地域定着率の向上が義務として課されていますが、大学の努力のみでは達成困難な目標であり、ある意味で理不尽な要求です。とは言っても、どうやら悠長に構える時間的余裕はなさそうです。地方国立大学は、地域の行政や産業界と連携して、本気で知恵を絞り、腰を据えて協働し、人口減少に歯止めをかけるための具体的成果を生み出す責任がある。そんな時代に立ち至ったということなのでしょう。

しかしながら地方創生の真の原動力は、マスとしての人材の数もさることながら人材の質であり突破力のある個人の存在だと思います。地域への愛情と世界を俯瞰する視野を併せ持ち、かつ行動力と起業家精神に富む個人です。彼らが地域や地場産業の現場で、新たなチャレンジを開始し、やがて一定の形で芽を出し始めた時に、行政や大学や経営者を含め地域社会をあげた支援体制で大きな果実に繋げていく。そんな地域社会システムが地域のいたる処で稼働し始める。中央の大企業の誘致も必要でしょうが、多様性の時代の個性ある地域創生には、そんなストーリーがよく似合います。時間はかかっても、主役を務める個性的な人生の冒険者（人財）が、秋田大学から一人でも多く育ってほしいと思います。

国全体の未来も、大学による新たな知の創造と人材育成にかかっています。大都市に存在する一握りの所謂「研究大学」のみで、我が国の学術、科学技術創造の基盤が維持できるとは思えません。86国立大学の多様性こそが大切です。地方国立大学は、日本の学術・研究の基盤を維持するとともに、特色ある領域で日本をリードし世界に貢献する新しい価値観と人材を創出する役割を担っています。喫緊の課題である地方創生に真に大学が貢献するにも、グローバルに通用する教育・研究の質が必要。そんな時代のはずです。地球規模課題の矛盾は辺縁・地方に凝縮します。地域を掘り下げることで、世界が見えてくる。そんな時代です。地方創生への貢献と世界レベルでの貢献は、決して相反する価値観ではなく、二つの価値観は、グローバル化する現代の地方国立大学というコインの表と裏の関係といってよいのです。秋田大学のチャレンジに期待します。

COLUMN

秋田魁新報社との包括連携協定記念コラム

秋田魁新報社との包括連携協定締結を記念し、秋田魁新報社で活躍している秋田大卒業生よりコラムを書いていただいております。

秋田魁新報社統合編集本部
報道センター政治経済部
記者　村田 悠輔

教育文化学部地域科学課程
（現・地域文化学科）
2016年3月　卒業
2016年4月　秋田魁新報社入社
岩手県北上市出身

街との近さ生かして

この広報誌「アプリーレ」を勝手にライバル視していた時期があった。在学中、学生新聞サークルに所属していたときのことだ。発行費用を得るため、広告を募りに地域の商店を巡ると、9割方アプリーレと間違えられた。自分たちが発行する新聞の影響力の低さに悔しさを感じていた。

当時制作していたのは「The Akita University Post」という新聞。年4回ほど発行し、サークルや地域貢献といった学生の活動に加え、地域の商店などを取り上げた。2016年に休刊となったが、取材や執筆、紙面のレイアウト、広告集めまで幅広く手掛けた。さまざまな学科やサークルに所属する学生と話し、取材や広告依頼で街の大人たちにも会いに行った。

大学時代の経験が進路選択に影響し、新聞記者になった。貪欲に真実を追い求め、取材に駆け回る先輩記者の姿を見て、いかにプロの仕事と学生のサークルが違うかを痛感した。

一方、自身が書いた記事がきっかけで議論を喚起できたこともあった。大きな達成感を味わうと同時に、新聞の持つ影響力に驚かされた。学生時代の自分からは想像がつかなかったことだ。

入社から間もなく3年。現在は政治経済部に所属し、秋田市の商業に関する取材を主に担当している。JR秋田駅前でネタを探すこともある。学生時代から幾度となく歩いた地区だが、通りに並ぶ店で扱う商品や経営者の店づくりへのこだわりなどを聞き、勉強することが数多い。学生時代にもっと街に出ればよかったとつくづく思う。

昨年は、秋田駅周辺で数年後の街を形成するテレビ局や学生マンション、体育館、高齢者向け賃貸住宅の工事が次々と始まり、関連の取材に走った。県と市が整備する新文化施設の着工に向けて、県民会館の解体も進んでいる。昨年春に県民会館で入学式を行った秋田大の1年生が卒業する頃、街の風景は大きく変わっているはずだ。

市中心部にこれからお目見えする各施設は、幅広い年齢層の人に利用されることだろう。多世代交流が期待される街に、もっと秋大生の姿があっていい。生のバンド演奏や高齢者向けの落語会、研究成果の発表や美術作品の展示など、あらゆる「街とのコラボ」に取り組んでみてはどうか。

秋田駅近くにキャンパスがあることだ。就職してから旅行で県外各地を訪れたが、地方都市でこれほど中心部とキャンパスが近い大学は多くない。この立地を生かし、秋大生が街の大人たちともっと交流を広げ、にぎわい創出に貢献したらどうだろう。学生たちがもっと街に飛び出し、溶け込んでくれたらと思う。

若者の力をどう街づくりに生かせるのか。新しい発想と行動力を受け入れるため、街づくりの進め方にどのような工夫が必要なのか。その可能性を探ることも今後の取材テーマとしたい。

学生広報スタッフ活動備忘録（仮）

秋田大学手形食堂

今回は秋田大学手形食堂、店長の時岡香美さん、レジ担当の室田智子さんにお話を伺いました。

時岡店長は、手形食堂で募集していた3か月間の短期アルバイトに応募したことがきっかけで、以来30年間勤務しているそうです。現在では店長として、勤務されています。

室田さんは、現在手形食堂で勤務すること9年目。レジ打ちが速くなるまでにおよそ3年くらいかかったそうですが、今では東北地方大学食堂の従業員の中でもレジ打ちの速さで名高く、学生や他の従業員の方々からも大きな信頼を得ています。

素敵な笑顔で取材に対応していただいた時岡店長（右）と室田さん（左）

手形食堂の1日の利用者数はおよそ2000人。そのうち昼の11時から13時の2時間の利用者数はおよそ1200人とのこと。特に多くの学生で込み合うのは12時からの20分間程度で、その間は従業員総出で席利用や特設コーナーでの対応に追われ、また、この時間のために朝から念を入れた仕込みがされているといっても過言ではありません。

食堂で使われる食材にはすべて食品カルテがあり、生協組合で登録された食材のみが使われるため、高い安全性が確保されているということです。それに加えて、食堂で提供されるメニューは他大学と統一されたレシピのため、いつでも安定した美味しさが維持できます。また、期間限定でしばしば開催される「○○フェア」と題されるイベントでは、通常では提供されないメニューも登場するなど、利用者を飽きさせません。

レジ対応中の室田さん

大学食堂が学生や保護者、大学職員の方々、さらには地域の人々に愛され、多くの利用者に利用され続けているのは、このような工夫が大きく貢献しているのでしょう。

「学生さんたちが生協のコプリカカードを使うとき、ぜひ名前が書いてある表側を見えるように置いてほしいな」と笑った室田さん。日々食堂を利用する学生たちを母親のような気持ちで見守り、レジ打ちをしながらもカードの名前を見ることで、顔と名前が一致している学生も少なからずいると話します。時岡店長は、「一番のやりがいは、学生さんたちがおいしいと言ってくれること」と話し、室田さんも大きくうなずき共感しました。お二人の気さくで明るい物腰、そして学生を母親のような気持ちで見守る優しい表情は、手形食堂を支える大きな柱であると強く確信しました。

学生の皆さん、お待ちしています（一番左:時岡店長、一番右:室田さん）

Live2Dモデル

学生広報スタッフオリジナルキャラクター「キースとぐーす」のLive2Dモデルを作成しました。詳しくは、学生広報スタッフ公式twitterをご覧ください。

▲学生広報スタッフ公式twitter

学生広報スタッフインスタグラム開設

学生広報スタッフ公式twitterにつづき、学生広報スタッフインスタグラムを開設します。多様な角度から「秋田大」を伝えていきますので、乞うご期待！！

新メンバー続々増えています！

11月、12月と新メンバーが加わり、現在、学生広報スタッフは7名で活動中です。新メンバー加入の際には、委嘱状交付式と懇談会を行い、親睦を深めています。引き続き、新メンバーを募集していますので、興味をお持ちの方はtwitterまたは広報課までご連絡ください。

志立理事と学生広報スタッフ

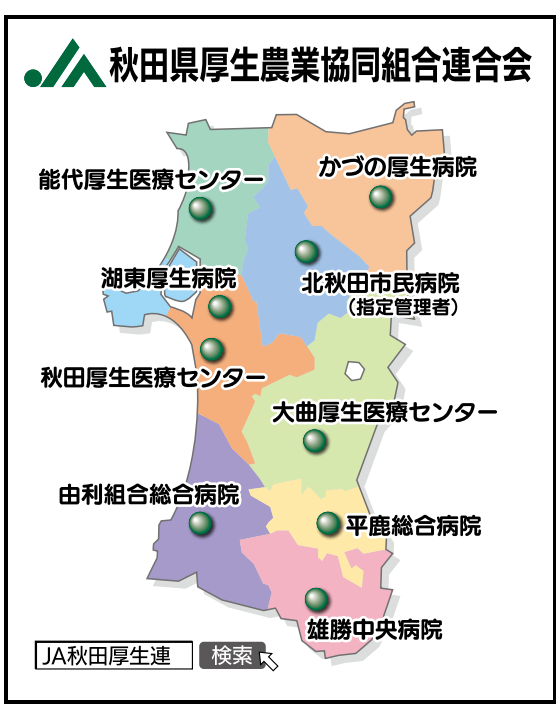
懇談の様子

▲応募はこちらから

企画展実施

平成30年10月1日から10月18日の期間、手形キャンパスのインフォメーションセンターで「学生広報スタッフ活動備忘録(仮)～インフォメーションセンター出張版～」を開催しました。

お越しいただいた皆さま、アンケートにご協力いただいた皆さま、ありがとうございました。皆さまからいただいたご意見を今後の活動にいかしていきたいと思いますので、お楽しみに！



僕らの課外活動 番外編
僕らの学生自主プロジェクト

「学生自主プロジェクト」事業は、目的の達成（課題の解決）に向けて複数の学生が協力しながら活動する課題解決能力の育成を目指した取り組みであり、いわゆるPBL（Project-Based Learning）と言われるものです。秋田大学では、学生自らが設定した課題の解決に向けて、自主的に考え活動するための支援活動を行っています。

あきたこもちプロジェクト

○代　　表：高橋 徳実
（理工学部物質科学科 4年次）
○所属人数：7人
○活動日時・場所：
毎週木曜日　教育文化学部3号館110室

あきたこもちとは？

「あきたこもち」とはもち米を一切使用せずに、もちもちとした食感が楽しめるオリジナルの食べ物の呼称です。

私たちの身のまわりには、“秋田＋小野小町＝あきたこまち”をモチーフとしたネーミングがたくさん考えられてきています。そこで、このプロジェクトでは「こまち」と「もち」を掛け合わせて「こもち」という語を創作し、さらに「あきた」と組み合わせて「あきたこもち」という創造語を生み出しました。この「あきたこもち」という言葉のイメージから、それに見合うオリジナル食品開発を目指し、作り出すことに成功しました。

あきたこもち
イメージ図

活動内容

「あきたこもち」プロジェクトが始まったころの話によると、アイディアからのスタートのため、とても餅とは言い難いものばかりだったそうです。創始者（湊翔太郎氏）いわく「まずい！こんなの食べれるか～～！！」と叫ばざるを得ないくらいのものでした。それからというもの、使用した餅つき機が動かずに止まってしまう問題がよく発生し、悩ましい日々が続きました。しかしよく考えると、餅つき機というのは本来もち米用に設計されたものであるため、うまくいかないのも当たり前でした。それでもめげずに試行錯誤を続けたところ、あるときこれまで体験したことのない、マシュマロのようなもちもちとした食感の「あきたこもち」が誕生しました。以来、延べ10人以上がこのプロジェクトに関わり、データを集積し、今ではエラーが発生することもなく、製造法と保存法が確立できるまでに至りました。誰も体験したことのない食感のオリジナル食品を作り出したのではないかというわくわく感が、このプロジェクトの原動力となっていることには間違いありません。

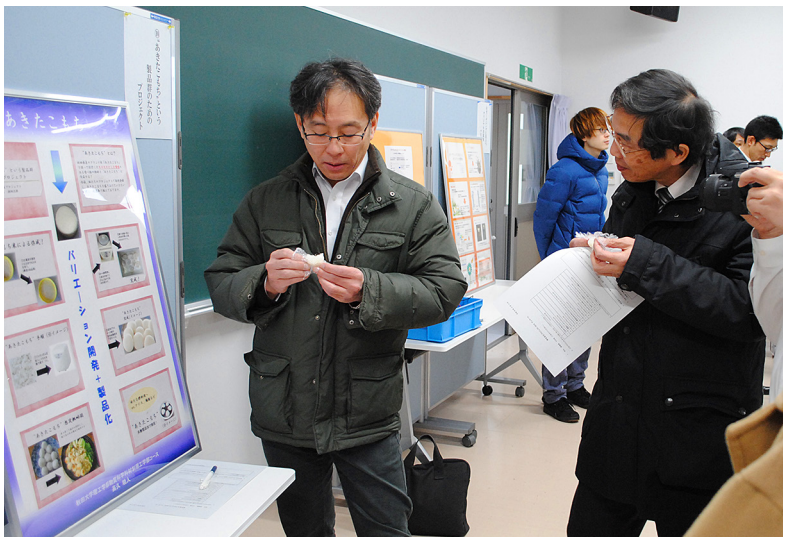
試食会の様子

製品化をめざした理由

毎年特にお正月に、食べ物を飲みこむ力の弱い方や高齢者の方、小さなお子さんが餅をのどに詰まらせる事故を多く聞きます。そんな悲しいことが少しでも減るようにという社会貢献の気持ちと、また、「あきたこもち」がお米を有効に活用できる新しい方法となるのではないかという期待、そして何よりもこのマシュマロのようなもちもちとした新食感をより多くの消費者に届けたいという思いから「あきたこもち」の製品化をめざしました。

中間報告会2018

12月13日に「ものづくり学生自主プロジェクト2018中間報告会」が行われ、私たちのプロジェクトもポスター発表をしました。説明すると同時に試食もしてもらい、「あきたこもち」を身近に感じてもらえる機会になったと思います。「あきたこもち」自体は、お米本来の甘さをいかしたやわらかな甘みがあるものですが、今回の試食では、あずきや栗のトッピングも行い、味のバリエーションを増やしました。食べた方からは、「おいしい！」という感想はもちろんのこと「食感が不思議で、これなら子供からお年寄りまで大丈夫そう」「ホワホワなのにサクッとしている」「製品化が待ち遠しい」というお言葉をいただき、これからの活動の励みになりました。



今後の展望

オリジナリティの確立や意匠登録等を進め、製造販売に向けた課題を一つ一つ解決し、製品化を実現していきたいと思っています。

高校生・新入生へのメッセージ

皆さんには何か「こうしたい」「こうなればもっとよくなるのになあ」という“思い”はありますか？どんなに小さな“思い”でも、実はそれがある人にとってはとても大事なことであったりもするのです。『ものづくり』とはそんな“思い”を“カタチ”にすることだと思います。皆さんもぜひ“カタチ”になったときの感動を味わってみませんか？

僕らの課外活動

秋田大学競技ダンス部

○代　　表：小野 彰斗
（教育文化学部学校教育課程 3年次）
○所属人数：16人
○活動日時・場所：
月 17:00～19:00　明徳地区コミュニティセンター
火 17:00～19:00　旭川地区コミュニティセンター
金 17:00～19:00　理工学部講義棟
（アクティブラーニング棟）

競技ダンスとは

競技ダンスとは社交ダンスを競技化したもので、男女がペアになり、ダンスの美しさや技量を競う芸術スポーツです。社交ダンスと聞くと、年配の方が取り組まれている姿をイメージしますが、競技ダンスのトップ選手は10代から30代がほとんどで、まさにスポーツ競技と言えるような迫力があります。そのスタイルは主にスタンダードとラテンの2つに分かれます。スタンダードとは、王子様とお姫様が踊るような優雅なスタイルです。ラテンとは、少しアクロバティックな要素を含み、激しく情熱的なスタイルです。

部の雰囲気

秋田大学競技ダンス部は今年創部3年目で、他大学と比べてまだまだ部員は少なく、みんなで部活動を作っていこうという雰囲気があります。ダンスを楽しむために部活動に参加する人や、競技の世界で勝っていくことを目標に部活動に励む人もいます。みんなの仲が良く、日々の部活動にはほぼ全員が参加し、切磋琢磨しながら練習を行っています。また、秋田大学だけでなく他大学との交流も盛んなため、他大学の学生ともライバルでもあり趣味仲間としても、とても濃い関係を築いています。

未経験者でも大丈夫？

現在入部している人は、100％未経験者です。高校までは野球、剣道、弓道、重量挙げ、合唱、吹奏楽等、運動部から文化部まで幅広い経験を持つ部員が大勢います。中にはスポーツが苦手な女性部員もいますが、楽しんで踊りながら、日々の筋トレも一緒にがんばっています。本人いわく、「少しは体を動かせるようになったかな？」と言っています。

オープンキャンパスで高校生にダンスを披露しました

指導やコーチについて

部内での指導は3年生が担っています。また、部活動以外では、ダンス教室の先生方にもご指導いただいています。先生方のご好意により、秋田大学の学生は特別料金で教えてもらっているため、とても助かっています。先生方はとてもかっこいいプロダンサーで、部員は皆エネルギーをもらっています。

大会について

大会の時、女性はドレスを、男性は燕尾服やラテンシャツと呼ばれるかっこいい衣装を着て踊ります。11月に行われた第95回全東北学生競技ダンス選手権大会では、秋田大学史上最高の成績を残しました。新人戦という1､2年生のみで行われる競技のスタンダード部門で、秋田大学の2年生カップルが優勝しました。他のカップルも今までより高い成績を残し、もっと上を目指すモチベーションになりました。

新入生・高校生へのメッセージ

競技ダンスはほとんどの人が大学から始めていて、一生楽しめるスポーツです。新しいことを始めたい人、全国で活躍したい人、大学生活を充実させたい人、ぜひ！あなたの入部（見学、体験等）をお待ちしています！

NEWS＆TOPICS

ニュース＆トピックス

2018.09. ›››2018.11.

SEPTEMBER

第10回テクノフェスタを開催

9月30日、秋田大学技術系職員の専門技術を地域の方々や子供たちに広く知ってもらうことを目的として、体験型企画や医理工系の分野に関心を持ってもらえるような企画で大学職員の技術を紹介する「秋田大学総合技術部第10回テクノフェスタ」を秋田市の秋田拠点センターアルヴェで開催しました。このフェスタは2009年から行われており、今回で10回目。

会場には、日頃の研究成果を基にした専門技術を学ぶことができる体験企画等として11のブースが設けられ、資源学系の研究室で使われている材料で万華鏡を作ったり、鋳造技術を使ってカラフルなキャンドルをつくったり、VRゴーグルでバーチャルリアリティーの宇宙を体験など、子どもたちや一般市民が普段なかなか体験することができない企画のなかで、総合技術部職員が研究成果に裏付けられた技術を丁寧に説明しました。

当日は、家族連れを含む一般市民約260名の参加があり、大変な賑わいを見せていました。

水と油の性質を観察する親子

OCTOBER

ホームカミングデーを開催

10月20日、秋田大学の卒業生を対象に、「第4回秋田大学ホームカミングデー」を開催しました。

このイベントは秋田大学全学同窓会及び各学部同窓会の協力の下で実施され、これまで学部単位で実施されていたものを平成27年度から全学的な取り組みとして開催し、今回で4回目となります。

記念講演会では、はじめに秋田大学の山本文雄学長が挨拶。続いて、秋田大学全学同窓会を代表して秋田大学全学同窓会兼教育文化学部同窓会「旭水会」の千葉昭会長から挨拶がありました。

引き続き、山本学長から秋田大学の活動実績について報告があった後、気象キャスターの村木祐輔氏が「秋田大学初の気象キャスターになるまで」、東北大学教授の古川徹氏から「ゲノムは医療を救う」、元東北大学客員教授、ペンシルヴェニア大学客員教授の安彦兼次氏から「秋田大学の宝物」と題して講演。また、平成30年1月に設置された秋田大学高齢者医療先端研究センターの大田秀隆センター長から同センターの活動実績について報告がありました。当日は、参加者が100人を超え、会場は盛況となりました。その後、会場を移して行われた交流会では開始に先立ち、秋田大学生サークルの混声合唱団「A. Choir（エース・クワイア）」から秋田大学生歌「白雪かほる」などが披露され、歓迎を受けた参加者はその透き通った歌声にしばし耳を傾けていました。交流会は山本学長をはじめ秋田大学役員・教職員や学生も参加し、先輩である同窓生の当時の思い出話などに聞き入りながら、にぎやかに歓談、情報交換が行われました。

講演する安彦氏

講演する古川氏

講演する村木氏

「あきたビジネスプランコンテスト」グランプリ受賞

10月25日、秋田市内のホテルで「あきたビジネスプランコンテスト」の最終審査会（プレゼンテーション最終審査）が行われました。秋田大学から5名の学生がファイナリストとして出場し、教育文化学部2年の荘野芹奈さんが見事グランプリを受賞しました。

荘野さんのビジネスプラン「観光トレジャーハント～秋田をもっとわくわくに！～」は、「宝探し」をしながら県内を観光できる地図を活用した事業を提案したものです。外国人客向けの企画や婚活イベントでの活用も想定し「観光を盛り上げるとともに、人と人がつながる機会を提供し、秋田を元気にしたい」とアピールしました。

グランプリの受賞に、最初は驚きや戸惑いの表情を見せていた荘野さんですが、受賞後のスピーチの際、賞金の使い途について質問され「家族においしいものをごちそうしたい」と答えたところ、「起業に使わないの？」と突っ込まれ、会場は笑いの渦に包まれました。

秋田大学の5名の出場者は、すべて秋田大学COCキャリア認証プログラムに定める地域志向科目「『起業力』養成ゼミナール」の受講生であり、授業で各自が作成したビジネスプランをブラッシュアップし、コンテストに臨みました。堂々としたプレゼンは、審査委員はもちろんのこと、斬新なアイディアを聴きに会場に詰めかけた多くの観客の心をしっかりと惹きつけました。

あきたビジネスプランコンテストは、あきた企業活性化センターや秋田県、秋田市、商工団体、金融機関などでつくる実行委員会が主催するもので、有望な起業家を発掘して支援しようと2013年から毎年開催されており、今年度より「学生部門」が設けられました。

コンテストの審査結果は以下のとおりです。

●グランプリ	教育文化学部	2年	荘野	芹奈
●準グランプリ	教育文化学部	3年	佐藤	洋光
●グッドプラン賞	教育文化学部	2年	須藤	よしの
●審査員特別賞	理工学部	3年	佐々木	一織

グランプリ受賞の荘野さん（中央）

丁酉会は、秋田大学病院の患者、職員及び学生への便宜供与に関する事業を行うとともに、医学研究の奨励助成を行い、患者等の利便と医学振興に寄与します。

病院での生活を、もっと便利に、快適に

一般財団法人 丁酉会

保険調剤

丁酉会薬局（ていゆうかい）

秋田大学病院前

心を、つなごう。

わたしたちは、社会が必要なことは何かを考えて事業を通じて、未来のために、まちづくりや人財育成を行うことが大切であると考えます。

Daiwa Lease 大和ハウスグループ

大和リース株式会社
秋田支店
秋田市御所野元町 1-1-1　〒010-1414
Tel : 018-892-7152　Fax : 018-892-7153
www.daiwalease.co.jp

SKILL＆HEART

「秋田」だからできる
先端のICTを

秋田の有能な人材を採用し、育成・活用することで地域活性化に貢献してまいります

株式会社テクノス秋田
代表取締役　相田龍三
秋田県秋田市中通3丁目2番44号
秋田河北ビル5F
TEL 018-884-7090 FAX 018-884-7091
http://www.tks-akita.co.jp/

technos

NOVEMBER 11

にかほ市と連携協定を締結

10月25日、秋田県内自治体のにかほ市との連携協定締結調印式を実施しました。

この協定は、秋田大学とにかほ市が保有する資源を有効活用し、これまでの取り組みをさらに強化させるとともに、秋田大学が持つ専門的な知見や若者の視点を活かし、双方にとって有益で持続性のある連携を進めて、地域社会の発展に寄与することを目的として締結したものです。

調印式では、にかほ市の市川雄次市長から「にかほ市ではジオパークなどの自然環境や天然資源を生かして活力ある地域を維持していく取り組みについて、これまでも秋田大学には学術的知見によるアドバイスをいただいており、今後も学生の学習フィールドとしての活用とともに、観光や地域振興の面での人材育成をお願いしたい」と挨拶がありました。これを受け山本文雄学長が「協定に掲げた地域振興・地域課題の取り組みに関すること、地域福祉の向上に関すること、教育の推進・人材育成に関すること、安全安心な地域づくりに関することについて、にかほ市に対しこれまで以上に秋田大学として取り組んでいくとともに、この協定を機ににかほ市と秋田大学がそれぞれの持ち味を発揮し、さらに幅広い分野で相互に協力して大きな成果を挙げていきたい」と述べました。また、引き続き開催された基調講演会では、大学院教育学研究科の林信太郎教授から「『ぶらぶらバーチャルツアーinにかほ市』～ジオパークとしての地形・地質の価値について考える～」と題して講演があり、クイズ形式による出題で、にかほ市の自然環境や歴史などが参加者の関心を惹きつけていました。

今回の締結で、秋田大学が協定を結ぶ自治体数（秋田県含む）は16件目となります。

協定を締結し握手する山本学長（右）と市川市長（左）

アラブ首長国連邦大学と大学間協定を締結

11月6日、山本文雄学長が佐藤時幸副学長・大学院国際資源学研究科長等とともにアラブ首長国連邦（UAE）大学を訪問し、大学間学術協力協定を締結した。UAE大学で執り行われた署名式では、山本学長とAlbaili学長が和やかな雰囲気の下、協定書にそれぞれ署名し、山本学長から「本協定に基づく具体的な協力として、資源開発に関する地質・地球物理学分野における共同研究、研究者や学生の交流等が期待される」との挨拶がありました。

UAE大学は、1976年に連邦を構成する7首長国の一つであるアブダビ首長国の東端に位置する都市アル・アインに設立されたアブダビ首長国最初の国立大学で、教育・研究水準及び規模ともにアブダビ首長国屈指の総合大学です。

今回の協定締結により、秋田大学の大学間国際交流協定校は、30か国・地域の58大学となりました。また、UAEの大学との協定締結は初めてとなり、本協定に基づいて、UAE大学内に秋田大学の共同研究室が設置されました。共同研究室の設置は東南アジアの4大学に続くもので、中東では初めての設置となります（事務所を除く）。

大学間学術協力協定書に署名を行う山本学長（左）とAlbaili学長

“県民の健康を守る”医療フォーラムを開催

11月17日、呼吸器疾患をテーマとした“県民の健康を守る”秋田大学医療フォーラム「空気を美味しく吸うために　～肺の病気の予防と治療～」（主催：秋田大学医学部、医学部附属病院、本道医学振興会、共催：秋田県、県医師会、秋田魁新報社及び秋田テレビ）を市内のホテルを会場に市民ら300名余の参加を得て開催しました。

医療フォーラムは2012年から開催され県民から好評を得ており、第8回目となる今回は、呼吸器疾患の症例と最先端の治療技術、医療現場や行政の現状、やさしい禁煙方法などを広く県民に紹介することを目的として、フリーアナウンサーの小倉智昭氏（秋田市出身）を特別ゲストに迎えて開催したものです。

秋田大学の山本学長の開会挨拶の後、羽渕友則附属病院長の進行により、タバコ肺（COPD）について中山勝敏同附属病院呼吸器内科教授から、肺がんについて南谷佳弘同附属病院呼吸器外科教授から、呼吸リハビリについて佐竹將宏同大医学部理学療法学講座教授から、受動喫煙ゼロに向けた県の取組について堀井啓一秋田県副知事から、最後に、やさしい禁煙法について三浦進一秋田県医師会常任理事からそれぞれ講演がありました。

後半のシンポジウムでは、小倉氏が登壇し尾野恭一秋田大学大学院医学系研究科長がゲストインタビューを行い、2人の軽妙な掛け合いが繰り広げられました。引き続き、小倉氏と講演者5人によるパネルトークでは、来場者から事前に寄せられた質問に対し各専門分野のパネリストが、健康維持のためには禁煙のみならず受動喫煙対策も大事な課題であるなどと語りました。

三浦常任理事からは、「イヤなことをタバコで紛らわす人は多忙やストレスが溜まっている時を避けた方が良い。口寂しくなったら冷水や氷などを口に含んだり、ガムをかんだりすることもよい」と禁煙に役立つ助言がありました。また、若い頃に何度も禁煙に挑戦し、29年前に成功したという堀井副知事は「禁煙を始めてニコチンが切れる3、4日目が最もつらかった。ただ、ちょうどそのとき体調不良で寝込んでいたことが奏効したかもしれない」と振り返りました。

最後に伊藤宏副学長の「本日の学びを周りの方々に伝え広めて欲しい」との挨拶でフォーラムを締めくくりました。

パネルトークの様子

表紙は

秋田大学 写真部
Akita-univ. Photography Club

今回の表紙写真は、手形キャンパスで行われているイルミネーションを背景に撮影したものです。急なお願いにも関わらずモデルを引受けていただいた虻川さんですが、素敵な表情をたくさん見せてくれました。写真部の学生たちは、猛吹雪の中、撮影の構図などを話し合い、幻想的な写真となるよう頑張ってくれました。

寒い中、モデルの虻川さんをはじめ、撮影にご協力いただいた皆さまありがとうございました。

広報課

モデル：教育文化学部学校教育課程2年　虻川涼香さん

●撮　影　日：2018年2月13日（火）
●撮影場所：秋田大学手形キャンパス
●撮　影　者：理工学部システムデザイン工学科4年　頓部真大さん

おいしい魚を世界の海から食卓へ
丸水秋田中央水産
代表取締役社長　鈴木信夫
秋田市外旭川字待合28
TEL 018-869-5311㈹ FAX 018-868-1931

Aprire
秋田大学広報誌〈アプリーレ〉
第62号 平成31年1月発行
No. 62
2019 JAN
[企画・発行] 国立大学法人 秋田大学 広報課 | 秋田市手形学園町1番1号 〒010-8502 TEL:018-889-3019 FAX:018-889-3242 E-mail:kouhou@jimu.akita-u.ac.jp |

イベント&講座・講習会 Event,Seminar,Workshops & Extension course

催し物

教育文化学部天文台イベント

天文サイエンスカフェや、45cm反射望遠鏡と10cm屈折望遠鏡を使った夜間天体観察会を実施します。

- 2月2日(土)16:30～18:30
- 3月2日(土)17:00～19:00
- 4月6日(土)18:00～20:00
- 教育文化学部3号館3階301地学実験室ほか
- 対象／どなたでも
  (夜間観察会は中学生以下は保護者同伴)
- 参加費／無料

☎018-889-2655(教育文化学部地学研究室)
●mouri@gipc.akita-u.ac.jp

平成30年度秋田大学卒業式

- 3月21日(木)10:30～
- 秋田市立体育館(秋田市八橋本町六丁目12-20)
- 対象／卒業生、修了生、保護者等

☎018-889-2207(総務企画課)

平成31年度秋田大学入学式

- 4月4日(木)10:30～
- 秋田県立武道館(秋田市新屋町字砂奴寄2-2)
- 対象／新入生、保護者等

☎018-889-2207(総務企画課)

イルミネーションとプロジェクションマッピングのコラボレーション

秋田大学手形キャンパスでは、街づくりの一環として、夜の学園街を生き生きとした魅力的な場に変え、学生だけではなく地域住民の方々にも親しんでもらえるよう、イルミネーションを点灯しています。

また、昨年度につづき学生が制作したプロジェクションマッピングの投影とのコラボレーションを期間限定で行っています。冬の夜をより華やかに明るく照らすイルミネーションとプロジェクションマッピングの光の共演をぜひご覧ください。

イルミネーション

- 2月25日(月)まで
  16:00～21:00
- 秋田大学手形キャンパス

プロジェクションマッピング

- 1月10日(木)、17日(木)、24日(木)、31日(木)
  2月7日(木)、14日(木)、21日(木)
  ①17:45～　②18:20～　③18:55～
  ※天候不良の場合は中止となる場合があります。
- 秋田大学手形キャンパス
  学生支援棟及び中央図書館渡り廊下

秋田大学みらい創造基金
ご協力をお願い申し上げます。

「秋田大学みらい創造基金」は、全学的な事業を支援する「一般基金」と、使途を特定した「特定基金」で構成され、現在、企業・団体や個人の皆様など多くの方々にご支援をいただいております。この基金は、教育・研究による社会への貢献という本学の使命を果たすための大きな支えとなっており、今後一層の拡充を図りながら、有効に活用させていただきます。

70周年記念事業寄附金の募集

秋田大学は昭和24年に新制大学として発足以来、2019年に創立70周年を迎えます。これを記念して様々な記念事業を展開する予定です。記念事業の一つとして実施する学生寮整備のための費用等を、秋田大学みらい創造基金一般基金(70周年記念事業)として広く募集いたします。皆様のご支援を賜りますようお願いいたします。

現在の学生寮(女子寮)

みらい創造基金による事業紹介

○留学生の稲刈り体験(一般基金)

課外活動「草木谷農村体験」に参加する留学生の移動にかかる経費をみらい創造基金(一般基金)で支援しました。

「草木谷農村体験」は潟上市豊川の山田集落草木谷地区における里山の保全等の体験型環境保全活動への参加と、留学生相互間及び地域住民との交流促進を目的としており、10月に行われた稲刈り体験には13名の留学生・日本人学生が参加しました。

○ホームカミングデーの開催(一般基金)

平成30年10月20日(土)に秋田大学祭と同日に開催した「ホームカミングデー」実施に係る経費をみらい創造基金(一般基金)で支援しました。「ホームカミングデー」は、秋田大学の卒業生に母校の近況をご覧いただくと共に、在学生、教職員との連携・親睦を深める機会として毎年実施しています。

※その他の事業については、秋田大学ホームページで紹介しています。

〈ご寄附のお願い〉 ●個人の方：一口　1,000円
●法人の方：一口　10,000円

この基金の趣旨をご理解いただき、なにとぞ複数口のご協力をお願いいたします。
また、継続的なご寄附もお待ちしております。寄附者様のご都合に合わせた寄附方法・金額の設定が可能ですので、詳細は基金事務室へお問い合わせください。

〈ご寄附の方法〉 ●振込によるご寄附　●クレジットカードによるご寄附
●古本募金によるご寄附　●遺贈によるご寄附

寄附のお申し込み、詳細につきましては、秋田大学公式ホームページをご覧いただくか、基金事務室までお問い合わせください。

〈古本募金のお願い〉

読み終わった書籍(CD・DVD等を含む)を本学の提携業者が買い取り、その売却代金をご寄附いただく「古本募金」をぜひご活用ください。5冊以上から送料無料でご指定の場所に集荷に伺います。ご希望の方は、下記にお電話いただくか、秋田大学ホームページからお申し込みください。

株式会社バリューブックス
0120-826-292(電話受付時間 10:00～21:00　日曜は17:00まで)
「秋田大学みらい創造基金『古本募金』の申込」とお伝えください。

〈寄附者ご芳名〉この基金の趣旨にご賛同、ご協力いただきました皆様へ、心より感謝申し上げます。今後とも秋田大学の教育・研究活動等に対し、格段のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

企業・団体等

●秋田大学有志一同　様　●すずきクリニック　様　●医療法人社団聡伸会　今村医院　様　●医療法人　にとう小児科医院　様　●医療法人社団　よいこの小児科さとう　様

個　人

●浅田　昌弘　様	●加藤　弘毅　様	●佐藤　愛子　様	●渋沢　進一　様	●関山　大樹　様	●豊澤　琴江　様	●松本　敏江　様
●池田　小百合　様	●煙山　紘平　様	●佐藤　孝　様	●白山　公幸　様	●髙橋　邦泰　様	●長田　信夫　様	●米山　奈奈子　様
●市川　逸郎　様	●小林　裕見子　様	●佐藤　美起雄　様	●進藤　大輔　様	●高橋　恵子　様	●那須　和広　様	●李　力行　様
●梅田　祐吉　様	●五明　昇　様	●三戸　学　様	●清野　卓郎　様	●田川　幸雄　様	●萩井　譲士　様	●渡辺　慎太郎　様

他　匿名希望　21名様・法人様(延べ数)(平成30年9月～平成30年11月末入金分　五十音順)

〈お申し込み・お問い合わせ先〉秋田大学みらい創造基金事務室　〒010-8502 秋田市手形学園町1番1号　☎018-889-3266(総務企画課内)　kikin@jimu.akita-u.ac.jp
秋田大学みらい創造基金は秋田大学公式ホームページからお申し込みいただけます。(http://www.akita-u.ac.jp/honbu/ed_fund/index.html)　秋田大学　みらい　検索